

# 石狩泥炭地跡地における幌向湿原の再生計画

\*矢部和夫（札幌市立大学）

猪子長（国土交通省北海道開発局札幌開発建設部）

坂元直人（株式会社エコテック）

高田雅之（道総研環境科学研究センター）

辻井達一（北海道環境財団）

## 1. 背景と目的

流域面積が全国第2位、北海道全体の5分の1の面積14,330 km<sup>2</sup>を有する石狩川では、明治43年（1910）に石狩川治水事務所が開設され計画的・組織的な治水事業が始められて以来、治水100年を迎えた。石狩川低平地に広がった湿原は日本有数の穀倉地帯に変貌し、55,000 haの面積を誇った石狩川流域の泥炭地では湿原が失われ、湿原面積は昭和58年（1983）の時点で119 haにまで激減した。かつて石狩平野に存在した3つの大きな原野では、美唄原野の美唄湿原（湿原主要部21.1 ha）、篠津原野の月ヶ湖湿原（約41 ha）、幌向原野の越後沼湿原（21.8 ha）が残存するのみとなった。

一方、国土交通省が管轄する石狩川の広大な河川敷地には、かつて泥炭地を開削し捷水路とした区間の高水敷に泥炭層が残り、一部は泥炭採取地として占用されている。この泥炭採取跡地の一部で湿原植生の名残を確認した。本再生計画は、大正11年（1922）より幌向原野を開削し昭和11年（1936）に通水を開始した”夕張川新河道”の泥炭採取跡地において、希少種サワシロギク、エゾサワスゲをはじめ、モウセンゴケ、オオイヌノハナヒゲ、ツボスミレ、サワギキョウ、ヤチカワスゲ、ホロムイヌゲ、ミカヅキグサなど、隣接する”越後沼湿原”と共通の植物相を確認したことを契機に、今後の河川管理に際する高水敷の湿原環境の保全再生手法を検討するモニタリングである。

## 2. 湿原再生試験の概要

北海道開発局札幌開発建設部では”夕張川新河道” KP5.5付近で確認された湿生植物に対して、潜在的な植生環境システムを解明し、当該地における湿原環境が再生可能となる区域を特定するために①ボーリング調査；当該地の土層分布状況（特に湿生植物の再生と関連性が高い泥炭）の把握、②地下水位観測；当該地の土層分布状況と地下水の関係を把握、③植物調査；当該地に自生している植物の分布状況を把握する3つの調査を試験的に開始した。

ミズゴケ属が優占するボグに由来する植物相の保全のためには、融雪水や雨水に由来する地表面水位の変動が年間を通して20 cm内外に安定するような水位環境を維持する必要があると考えるが、その可否を評価する地表面水位変動の面的把握及び、地表面水のpH、および電気伝導率の定期的観測結果を報告する。



泥炭採取跡地に再生した湿原の植生